

12:20 ~ 14:30 シンポジウムⅡ

地域医療構想、地域包括ケアシステムの構築に向けた地域包括ケア病棟(床)の現状と課題

1. 3つの病院機能から見た地域包括ケア病棟(床)

(1) 急性期ケアミックス型病院から

HITO 病院 病院長

石川賀代

2025年を見据えた地域医療構想が各地域で展開され自院の立ち位置を明確にすることが迫られる中、地域包括ケア病棟の受け入れ機能を最大限に活かし、地域特性に応じた機能を選択することも可能である。

本院が位置する医療圏では、高齢化率29%、新規入院患者においても75歳以上の高齢者の増加が著しく、退院困難例が増加しており、いかに早期より多職種連携による退院支援を行い在宅復帰支援を実施するかが急性期機能を維持するためにも重要な視点である。また、圏域内の後方連携先が乏しく県境に位置することもあり、他院からのポストアキュートの患者の受け入れや神経難病患者、医療依存度の高い患者のレスパイト入院など地域包括ケア病棟の受け入れ機能は多様化している。2年前より、サブアキュート機能の強化に努め、グループ内の介護施設からの紹介を含め病診連携の強化を図っている。

2014年に地域包括ケア病棟を35床で開床後、段階的に増床し、現在53床で運用している。ケア病棟の特徴は、多職種による在宅・生活復帰支援をどこまで高められるかだと考える。特に、高齢者の退院支援において合併症予防が重要であり、認知症、口腔ケア、リハビリ、リハビリ栄養などに早期より取り組んできた。今年開始した取り組みとして、体幹、下肢機能の低下した患者に対してその機能向上を促進する装着型ロボット HAL®腰タイプ自立支援用を導入した。装着して体幹動作や立ち座り動作を繰り返すことにより身体そのものの機能向上を促すため、HAL®を外した状態での自立度を高めることが期待できる。以前から実施している POC (point of care)リハビリに加え、より早く自宅に退院することを目指し、在院日数を短縮することにより、在宅へのサービス移行をより早期に実施することを目的としている。また、退院後の自宅訪問を行い入院中のケアやリハビリの支援体制の振り返りを行うことにより、スタッフの質の向上を目指している。

ケア病棟開設後4年を経過し、受け入れ患者の疾患の多様化やポストアキュート、サブアキュート患者の割合、在院日数にも変化がみられている。地域包括ケアシステムの実現に向けて、地域における在宅と病院をつなぐハブ機能を果たすためには、地域での信頼関係の構築、地域に必要とされる機能を提供し、本来の開かれた病棟となることが重要である。

今後、医療・介護連携をさらに推進するために地域包括ケア病棟が中心的な病棟となり、ICT 活用を含め、変化する時代に柔軟に対応できる可能性を感じている。